

住区内道路における子どもの道遊びに対する意識

福岡大学工学部 学生会員 ○糸永 匠汰 福岡大学工学部 正会員 辰巳 浩
 福岡大学工学部 正会員 吉城 秀治 福岡大学工学部 正会員 堤 香代子

1. はじめに

子どもにとっては、公園や空き地は勿論のこと、例えばそこに行くまでの道でさえ遊び場になり得る。住区では子どもの道遊びが起り得ることを前提としたみちづくりが必要なものと考えられ、実際に海外ではボンエルフ等の交通静穏化策により子どもに優しいみちづくりが進められている。

一方で、我が国においてもこれまでの交通安全対策等により交通事故件数自体は減少傾向にあるものの、子どもを持つ親の交通事故に対する不安意識は高い¹⁾。自由に外遊びができる環境が身近にあることによる発育への効果は明らかにされてはいるものの、実情としては安心して外遊びをさせづらい状況にある。また、かつては当たり前のようにみられた子どもの道遊びは現在必ずしも容認されるものではなく、地域におけるトラブルとなっている事例も散見される²⁾。交通安全対策を進める上で合意形成が困難な場合もある中、これらの道遊びに関わる現状を鑑みれば、子どもの道遊びの実態を踏まえつつ、その保護者や地域住民との折り合いのもと、子どもの安全を確保するための交通安全対策を展開していく必要がある。そこで本研究では、道遊びを行う子ども、その保護者、地域住民それぞれの住区内道路における道遊びに対する意識について明らかにしていく。中でも本稿は子どもの道遊びの実態と保護者の安心意識について明らかにするものである。

2. 調査概要

本研究では、まず小学生の子供をもつ保護者を抽出し、その保護者に対して小学生の子供の道遊びに対する意識を尋ねることとした。そしてその保護者を通じて、家庭の小学生の道遊びの状況について聞き取ってもらうことで小学生の回答を得ている。また、家庭に小学生の子供がいない回答者を地域住民とした。回答者は戸建てに住んでいること、小学生については公園や道路で外遊びをしていること、地域住民につい

表1 アンケート調査の概要

調査期間	平成30年11月末
配布・回収方法	楽天インサイトによるWebアンケート
配布・回収方法	900
調査対象	・全国の小学生およびその保護者(600) ・小学生の子どもを持たない成人(300)
主な調査項目	・個人属性 ・道遊びの現状について ・保護者の道遊びに対する安心意識 ・地域住民の道遊びに対する容認意識

ては実際に自宅前や周辺で子どもの道遊びを見かけることがあることを条件にスクリーニングを行っている。

3. 道遊びに関わる意識の実態

(1) 子どもの道遊びの実態

子どもの道遊びの実態について明らかにしていく。道路で遊ぶことのある子どもについては道路上で遊ぶときのことを、道路上で遊ぶことのない子どもには公園等での普段の外遊びの状況について尋ねた。まず、どのような遊びをしているかについて尋ねた結果(図1)、おにごっこやかくれんぼなどについては道路上以外の割合が高くなっている。一方でスケボー、ウェイクボードやローラースケートについては道路上の割合が高くなっていた。走り回るような遊びは公園等で、アスファルト舗装の道路上のほうが走りやすい遊びについては道路上で行われやすい傾向にあることがわかる。また、なわとびやボールの壁当てなど、一人でも取り組めるような遊びも道路上で発生しやすい傾向にあった。実際にそれぞれの場所での遊び相手について尋ねた結果

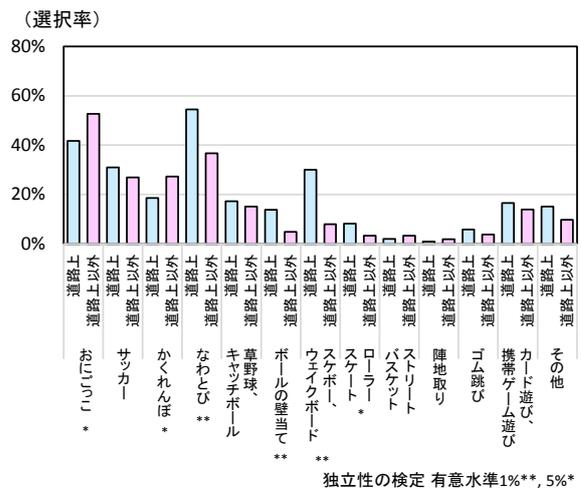


図1 道路上とそれ以外の場所での遊び内容

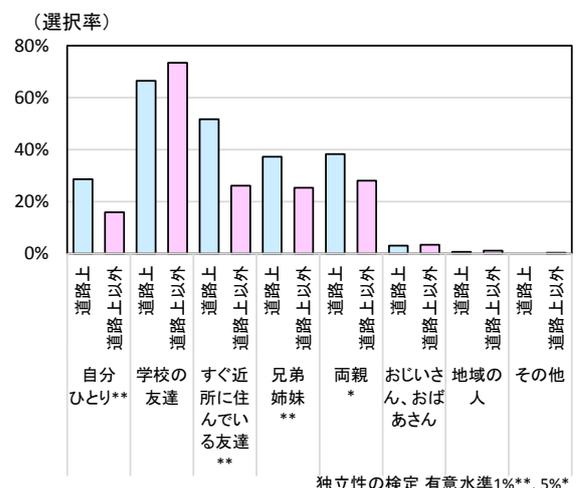


図2 道路上とそれ以外の場所での遊び相手

においても(図 2)、道路上では自分ひとりで遊ぶ割合が高いことが示されている。他にもすぐ近所に住んでいる友達や兄弟姉妹、両親の割合が高いことも示されており、身近に遊び相手がいるような場合にも道路上での遊びが選択されていることがわかる。

そして、実際にどのような道路でどのような遊びが発生しているのかを理解するために、まず自宅前の道路について最も当てはまる道路の特徴を保護者を選択してもらった(表 2)。そして、その自宅前の道路に加えて、自宅周辺の道路における遊びを行っている状況についても尋ねている。その結果、自宅前道路においてはどの遊びの割合も高くなっている一方、自宅前道路以外の周辺道路になるとどのようなタイプの道路であってもその割合は低くなっている。自宅前か否かが遊びの発生に大きく関わっているといえる。

(2) 小学生の子どもを持つ保護者の意識

ここで保護者に対して道路上で子どもたちが遊ぶことに対する安心意識を聞いたところ、不安との割合が高くなっ

ている。子どもが道遊びをしていることによるトラブルについては約 80%の人が経験がないとの回答であった。

4. 子どもの道遊びに対する保護者の安心意識

最後にこの保護者の安心意識に関わる要因について分析を進める。保護者に対しても図 3 と同様、各道路において子どもがそれぞれの道遊びを行うことに対する安心意識について尋ねた。それぞれ 4 種の遊びを目的変数とし、道路種類等を説明変数とした二項回帰ロジスティック分析を行っている(表 3)。どの結果をみても、道路位置が有意な変数となっており標準偏回帰係数が最も高くなっているなど、自宅前かどうか特に保護者の安心意識に関わっているといえる。実際に、安心と感じる確率を表 3 の結果から算出してみれば、例えば日没前の自宅前の道路でかつその道路がタイプ III の通過交通排除型であった場合、その場遊びをしている子どもに対しては、安心を感じる確率は 86%となる一方、これが自宅前でなければ同確率は 25%まで低下している。

5. おわりに

本研究では子どもの道遊びに着目し、特にその実態およびその保護者の安心意識について分析したものである。

参考文献

- 1) 株式会社イード: 母親の子育てや子どもの安全に関する意識調査, <http://www.iid.co.jp/news/report/2015/042301.html>
- 2) JJI.COM: 新興住宅街の「道路族」～袋小路で騒ぐ親子、トラブル解決の糸口は?～, <https://www.jji.com/jc/v4?id=201712drz0001>

表2 アンケート調査の概要

タイプI	ゾーン内の発生・集中交通量を外周道路へ導くゾーンの骨格道路
タイプII	ゾーン内の交通をタイプIに導くとともに、各住戸に対するサービス機能を持つ道路
タイプIII通過交通非排除型	ゾーンの末端で各住戸に対するサービス機能を有する道路。ただし道路ネットワーク上、通過交通は発生し得る
タイプIII通過交通排除型	ゾーンの末端で各住戸に対するサービス機能を有する道路。道路ネットワーク上、通過交通は発生し得ない

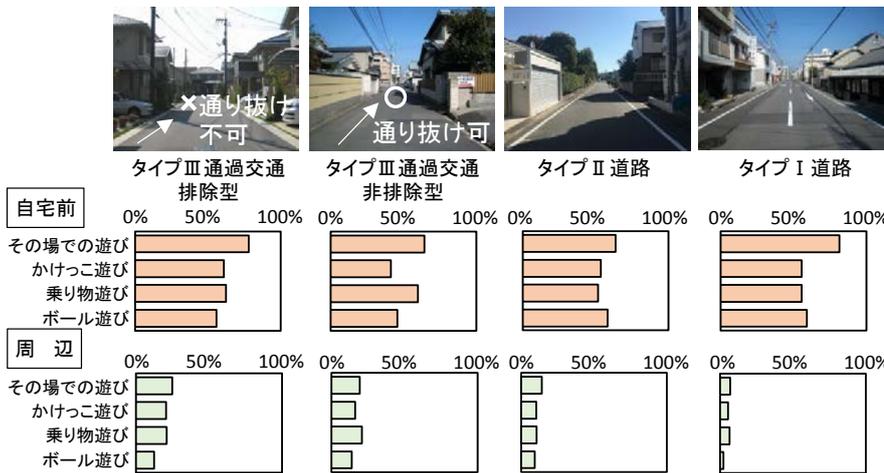


図3 道路タイプ別の各遊びの実施状況

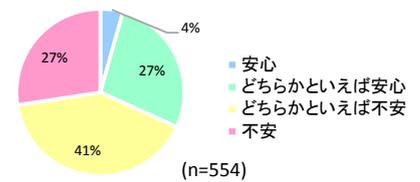


図4 保護者の安心意識

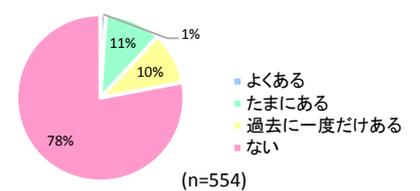


図5 トラブルの経験

表3 二項ロジスティック回帰分析

変数	その場での遊び				かけっこ遊び				乗り物遊び				ボール遊び			
	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比	p値	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比	p値	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比	p値	偏回帰係数	標準偏回帰係数	オッズ比	p値
時間帯(日没前1、日没後0)	1.204	0.237	3.33	0.000	1.174	0.228	3.23	0.000	1.115	0.214	3.05	0.000	0.765	0.147	2.15	0.000
道路位置(自宅前1、周辺0)	2.895	0.456	18.09	0.000	2.493	0.387	12.09	0.000	2.359	0.362	10.58	0.000	2.627	0.403	13.83	0.000
タイプIII通過交通排除型	1.494	0.256	4.45	0.000	1.141	0.193	3.13	0.000	1.206	0.202	3.34	0.000	1.055	0.176	2.87	0.000
タイプIII通過交通非排除型	0.646	0.111	1.91	0.006	0.303	0.051	1.35	0.229	0.698	0.116	2.01	0.005	0.264	0.044	1.30	0.348
タイプII	0.532	0.094	1.70	0.023	0.368	0.064	1.44	0.134	0.376	0.064	1.46	0.133	0.307	0.053	1.36	0.264
定数	-3.785			0.000	-3.852			0.000	-3.859			0.000	-3.945			0.000